

10. 自然現象

10-1. 時間（季節・1日の区分）

10-1-1. 季節

年の初めをアシリツア asir cup（一月）。新しい神（日の神）が見える。

[奥野ハツ氏]

年の暮れに麴を静内の町に買いにやらされた（行かされた）。シントコ sintoko（桶）におかゆをいれ、麴をまぜて、桶をキナ kina（ござ）を巻いて上下を縛って、何日かおいて養母は酒を作った。養母は酒作りが上手で、部落で酒を作る時は必ず声がかかった。発酵がおわるとざるにあけてしぼって漉す。残った酒粕もとっておくが、酒粕はきつくてまずかった。

[奥野ハツ氏]

10-4. 地理・地形

10-4-1. コタンの構造とその近隣の状況

私の育った村の農屋は、昔は、ノヤサルコタン noyasar kotan と言った。ノヤサルコタンは、村の真ん中にオプシケナイ opuskenay という川が流れていた。オプシケナイは、静内川の右岸（北側）を流れ、静内川に注ぐ小川であった。この川をはさんで、アイヌの家が20軒ほど建っていた。東側（静内川の上手）のほうが戸数がおおかった。村の指導者的な人（ニシパ nispa）である鷲塚鷲太郎や、クマ捕りの名人市橋ヨウキチは、東側（静内川の上手）に家があった。そのほか、この部落には、森崎、フクシマ、アサノ、アベ、イケダ、スギヤマ、ヒトザト、などの家があった。私の家はオプシケナイの西側（静内川の下手）にあった。皆、アイヌは、和人とは別に住んでいた。農屋の村の一番奥には本間善四郎という人が住んでいた。墓は炭山沢にあった（図16）。

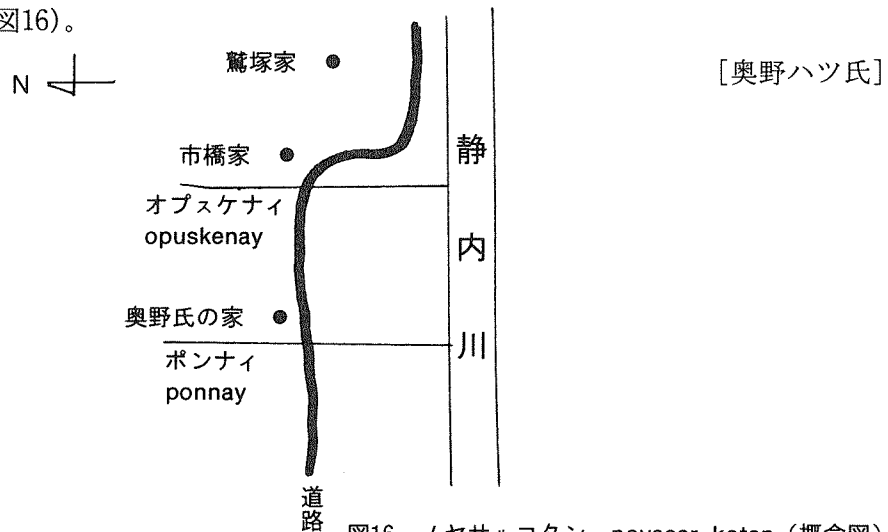


図16 ノヤサルコタン noyasar kotan（概念図）

農屋の私の家のすぐそばにポンナイ *ponnay* という細々とした沢水が流れていた。これも静内川に注ぐ川である。オプシケナイの西側に住んでいる人はこの沢水を利用していた。私の家と同じ沢を飲料水にしていた家は、玉屋さん、佐藤かじろうさん。向かって右側が玉屋さんで、左が佐藤さんであった。両方とも和人だ。さらに山手に市橋菊次さんという人が住んでいた。

働きに出るようになってから、私は静内の町でバケツを買った。シナの皮で縄をない、担ぎ棒を作って、これにバケツを下げて水を運んだ。金（かね）のひしゃくも使った。家には4升樽と8升樽があって、そこに水をたくわえた。水汲み場には、真ん中を半円形にくり抜いた板で水がせき止められていた。水は、このくり抜いたところから流れ落ちてくる。そこをすくうのである。オプシケナイの東側に住んでいた人達はオプシケナイの水を利用していた。

[奥野ハツ氏]

ポンナイ *ponnay* の沢の奥の山のふもとから湧いている水を汲んで親に飲ませたこともあった。冷たい水だった。わき水のことはいやむくか *yamwakka* と言った。

[奥野ハツ氏]

10-4-4. 地理・地名

静内川はシベチャリ *sipecari* と言った。

[奥野ハツ氏]

静内の奥で静内川は分かれている。西から流れて来るのはシペツ *sipet* と言う。東から流れて来るのはモンペツ *monpet* と言った。

静内川の二股の東の流れはモペツ *monpet*、西がシペツ *sipet* だ。東の川の方が幅広くて深くて水が多い。西の流れは川幅狭い。それでも舟でないと渡れないけれども。モペツは川が大きい、シペツというの川が細いということだということは教えられた。クマとりは、キムンコタン *kimun kotan* 奥山に入ったという。2つの川の間山にも入った。

[奥野ハツ氏]

静内川は東のモペツ *monpet* の方が大きい。西の川は細い。しかし、両方の流れともに大川には間違いない。

[奥野ハツ氏]

ピスンコタン *pisun kotan* は浜のこと。

[奥野ハツ氏]

御園は昔はイチブと言っていた。子どもの頃、農屋から焼酎を買いにやらされた。一本ならいいが、二本は重かった。子ども心に二本も焼酎持って歩くと笑われるなど思って恥しかった。

[奥野ハツ氏]